



Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター 2018年12月1日 第1号

(創刊号)

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人：石居 基夫

181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580 (直通) E-mail: dpc@luther.ac.jp <http://www.luther.ac.jp/>

わたしは良い羊飼いである。
わたしは自分の羊を知っており、
羊もわたしを知っている。
(ヨハネによる福音書 10：14)

DPC ニュースレター創刊にあたって

デール・パストラル・センター所長 石居 基夫

デール・パストラル・センターは、現代社会を生きる苦悩に寄り添う、教会の牧会のつとめをサポートすることを目的としたセンターです。

では、牧会とは一体どういうことなのでしょう。現代社会に生きる私たちは、生きづらさを様々に経験します。また、人生のそれぞれの時期に、私たちは自分では避け難いことや不慮の事故、災害、病気に襲われて、生きることそのものが苦しく、意味の見出されないような体験をすることがあるのです。そうした悲嘆や困難の中にある私たちが神様の恵みに新しく生かされていくように、教会はイエス・キリストによって示された「愛」を分かち合うのです。その具体的な働きが、「牧会（パストラルな働き）」と呼ばれるのです。

デール・パストラル・センターは、この教会の牧会的働きをサポートすることを活動の主な目

的としています。人間について、社会の問題も、人間の心の課題も専門的な研究が必要ですし、また特に、死やいのちについての根源的な学びを深めていくことが大切です。そうした研究を重ねつつ、牧師向けにも、教会のかたがたに向けても、また一般のかたがたに対しても、さまざまな学びや必要なプログラムを提供させていただけると 생각합니다。

このニュースレターは、このデール・パストラル・センターの活動を紹介すること、そして、私たちの研究の成果を、少しでも多くの皆様に知っていただこうと、センターの発足から5年目にしようやく発行する運びとなりました。どうぞ、このセンターの働きを応援いただきますとともに、大いにご利用いただければと願っております。よろしくお願いいたします。

デール・パストラル・センターの働きには3つの領域があります。パストラルの領域では、教会と牧師の牧会力を高めるための研究とプログラムを展開します。スピリチュアルの領域では、教会と現代社会における霊性/スピリチュアリティの研究と、教会・信徒の霊的成長のためのプログラムを作っていきたいと考えています。ソーシャルの領域では、大切な人をなくした子どもと家族へのグリーフ・ケアの働きを担いつつ、その研究と支援者の養成をしています。

パストラル Pastoral

牧会研究会のご案内

DPC 所員 堀 肇

牧師は神学校を出ると、大抵の場合は教会に遣わされ宣教の任務を担います。その主たる務めは説教と牧会。この二つは車の両輪のようなものです。講壇に上がってみ言葉を語り、講壇から降りて牧会に当たります。内容に即して丁寧に言えば牧会とは「魂への配慮」です。教会は現代に至るまで、この尊いみ業に携わってきました。牧師たちは今も、このため日夜苦闘しています。

DPCはこの課題に応えるべく、大学附属の「人間成長とカウンセリング研究所」が閉じられた後、その研究部門の遺産を引き継ぎ、牧師のための「牧会研究会」を開講しました。その内容は現代教会が直面している牧会上の諸課題を取り上げ学んでいます。例えば、精神障害、死と葬儀、自死、パーソナリティ障害、グリーフ・ケア、ジェンダー、教会内の人間関係など、どれ一つとっても現代教会が避けて通れない問題ばかりです。これらを DPC 所員の専門分野を活かしながら取り組んでいます。

また研究会では、これらの現場の問題を取り上げるだけでなく、牧会カウンセリングの基礎的なテーマや、事例研究を組み入れて学んでいます。様々な心理・社会的な問題に直面している方々の

「魂への配慮」を有効ならしめるためのものですから、単なるカウンセリングの勉強ではなく、最終的には霊的ケアを目標においてのものです。

受講者は全員、現在牧会またはそれに準ずる奉仕の場に置かれている方々です。また所属教団・教派も片寄ることなく広い範囲に及んでいます。これは牧師たちが自分の教団では牧師会や行事・イベントのための委員会などで集まることがあっても、一つの理念や目標をもった研究会に集まることは少ない現実を考えると、貴重な学びの場となっています。

と言っても、この研究会は単なる学習だけでなく、牧会者同士の交わりや討議を通して、自ずと牧会者へのケアやスーパービジョンの働きがなされていくという機能をもっています。これは牧会者の相互牧会とも言えます。D・ボンヘッファーは「われわれはまた、他の牧会者によって牧会してもらうことを必要としている。…それは牧会の本質にかかわる鉄則である」と言っていますが、こういうことが身に染みて分かってくるというのも、こうした研究会における恵みです。換言すれば「魂への配慮」が自分も含めた「魂の配慮」となることと言ってもよいでしょう。皆様の受講を期待しております。



スピリチュアル Spiritual

霊的深呼吸のすすめ

DPC 所員 齋藤 衛



2014 年 4 月、DPC を開所する際に私たちは教会への貢献を基本姿勢としました。孤独と霊的渇きが深刻と思われる現代社会にあって、教会も同じくその課題に悩ましさを抱えていると思われたからです。教会自身があえているように思えました。何が足りないのだろうか、どこか偏っているのだろうか。本当に大切なことを見失ってはいないだろうか。

そこで私たちは、霊性/クリスチャン・スピリチュアリティを取り上げ、学ぶことにしました。正直に言えば、霊性は私たちプロテスタント教会にとっては遠い言葉ではなかったでしょうか。少なくとも私にとってはそうでした。気になりながらも、捉えどころのない世界でした。それは私の中でどこか知恵によって言葉を読み解き、知恵の祈りをいつものこととしていたということかもしれません。私自身はそこに捕らわれていたと思います。起こします。そんなときただ深呼吸をしたくなった、それが私の実感です。深呼吸が必要だ、それが私の気づきです。み言葉も祈りも、深くいただきたい。これまでもみ言葉や祈りを決してなおざりにしてきたわけではないと思います。しかしどこか、自分の手の内にあった。立ち止まって手放して、霊的に聖書を読み、祈り、黙想によって御心を掘り起こしたいとそう思いました。それが深呼吸のように思えたのです。普段の呼吸として言葉も祈りも当たり前に行っていたのかもしれませんが。改めて霊的深呼吸によって、もう一度神が与えたもう霊的豊かさを再確認したいと考えました。

DPC はクリスチャン・スピリチュアリティ（キリスト教霊性）の研究部門を持っています。部門のメンバーである私たちは、クリスチャン・スピリチュアリティの歴史を学び、クリスチャン・スピリチュアリティを掘り下げ、それによって今の教会にどのように貢献できるか考えようとしています。教職と信徒にとって聖書をどう読むのか、またどう祈るのか、どう共に歩くのか、この点で深呼吸できるプログラムが提供できるよう会合を重ねています。その中の一つに、「五感のクリスチャン・スピリチュアリティ (Sensible Christian Spirituality)」があります。これはすでに神学校公開講座として提供されており、受講者に多くの気づきを提供しています。また月例でスピリチュアリティ研究会を持ち、現代における霊性をキリスト教の視点から、特にルター派の視点をもって検討しています。

問題は、聖書をどう読むか、そして、どう霊的同伴するかだと考えます。聖書を理性と知恵で読むこともできるでしょう。しかし神の啓示は「霊的なものによって霊的なことを説明する」（コリントの信徒への手紙一 2:13）とあります。霊的にいただく心なしにそれは示されることはないでしょう。また、牧会を霊的同伴と捉えるときに見えてくる意義は、牧師の働きを新鮮なものとするでしょう。

教会が霊的深呼吸の機会を得て、新たな思いの内に神の霊に生かされるのが私たちの願いです。教会の歩みがより確かに息づくために、DPC の会合を重ねています。

ソーシャル Social

グリーフサポートの活動紹介

～だいじな人をなくした子どもと

保護者の集まり～

DPC 所員 小嶋 リベカ

「すっきりした」「もう 100 回来たい!」「はじめてで不安だったけど楽しかった」「安心して自分が出せました(保護者)」。グリーフサポートの活動に参加した子どもや保護者の言葉です。

20 年ほど前、米国オレゴン州にあるダギーセンター（喪失体験を抱える子どもと家族の支援をする施設）のスタッフであったシンシア・ホホワイト氏を招き、「死別を体験した子どもたち・心のケアとサポート」というテーマで講演会が行われました。これをきっかけに、大人を対象とした集まり「身近な人を亡くした思いを語り合う会」（1997 年～）、また、子どもを対象とした集まり「だいじな人をなくした子どもの集まり」とその保護者を対象とした集まり（1998 年～）が開催されるようになりました。子どものための活動は、すでに 20 年以上継続して行っています。

今回、「だいじな人をなくした子どもの集まり」（以下、「子どもの集まり」）についてご紹介します。「子どもの集まり」は、親やきょうだい、その他の身近な人と様々な理由で死別した小・中学生を対象に、2 カ月に 1 回（2 時間半）開催されます。そのプログラムは、個々がしたいことをして過ごす時間と、みんなで一緒に過ごす時間とを、それぞれ確保するように配慮した内容です。

「子どもの集まり」では、安全で安心できる空間づくりが大切であるため、2 つのことを大切にしています。1 つは、子どもが遊びを通じて思いを表せる環境をつくることです。そのため、屋内

には、心身が抱えている溢れんばかりのエネルギーを、安全にかつ存分に発散するためのパンチングバッグやフワフワボールがある部屋や、創造的に遊ぶための手芸や絵画の材料などがおいてある部屋を用意します。

安全で安心できる空間づくりのために大切にしている 2 つ目のことは、集まりでのルールをみんなで守ることです。「パスしていい」「あぶないことはしない」などです。その一つに、「おとなと一緒にいる」というのがあります。この「おとな」とは、ファシリテーター、つまり、子どもの遊びや言葉によるあらゆる表現を、否定も評価もせずにそのまま受容するトレーニングを受けた人のことです。子どもとほぼ同人数のファシリテーターが寄り添います。

あるとき、「頭の中をバスケットボールぐらいのイガイガが駆けまわってるの」と話す女兒がいました。この女兒は、何回か集まりに参加しながら日常を過ごすうち、「今はね、(ボールは)ピンポン玉ぐらいになったよ」と教えてくれました。この活動は、だいじな人をなくしたことで子どもが抱えている、「会いたい」「さびしい」を含んだどう扱ったらいいのか分からない《いたみ》をゼロにすることを目指しているわけではありません。「子どもの集まり」では、それぞれが、その子自身の表現（遊びや言葉など）を通して、自分の中にある《いたみ》を、自分の一部として今後も持って日常を歩む、ほんの少しの力を養えるようなサポートが行えればと願い、1 回 1 回の活動を重ねています。



だいじな人を想って、キャンドルを囲む

DPC へ期待するもの

DPC 顧問 賀来 周一

賀来周一先生は、長年牧師としてお働きになられながら、臨床牧会をご専門として実践的な研究をされてこられました。1982年にルーテル学院の「人間成長とカウンセリング研究所」創設以来、ケネス・デール所長とともに同研究所をお支えくださった先生です。現在は、デール・パストラル・センターの顧問としてご指導くださっています。



ルーテル学院大学附属「人間成長とカウンセリング研究所」が形を変えて日本ルーテル神学校附属「デール・パストラル・センター」として新発足して4年が経過した。活動領域をパストラル、スピリチュアル、ソーシャルの三部門に分け、それぞれに実践的な活動を続けてきた。いずれの部門においても牧師、信徒のニーズに応じて、臨床的な面での取り組みに重心をおいてきたことはDPCの特色となっている。

パストラルな面では、牧会研究会をルーテル教会以外の教派の牧師も含めて開催し、牧会現場で遭遇する諸問題を取り上げてきた。通常、牧会現場で扱う問題は一人の牧師が扱うことが多い。そういう時に他者や専門家の知恵を参考にすることは大いに役立つ。しかもグループで問題を扱うことによって、独りよがりの視点から解放され思いがけない問題解決の糸口を発見することもある。さらに臨床牧会教育は神学校の正規科目になっているが、他教派の牧師も参加できるようになっている。今後エキュメニカルな方向での活動が期待される。

スピリチュアルな部門に関して言えば、現在信徒の参加も視野に入れながら地方の教会にまで

出かけて、霊性の涵養を目指して活動がなされている。最近、ホスピスや特別老人ホームにおいても死の看取りを巡って、牧師が専任チャプレンとしてスピリチュアルケアに従事する機会が増えてきた。また臨床宗教師の資格を持った宗教者もホスピスのみならず災害現場で活動するようになった。今後、社会が求めるスピリチュアリティの課題に取り組むことが求められている。

ソーシャルな部門では、大切な人との死別離別の体験を持つ子ども、また家族の集まりが活動している。死別離別の体験は人によって異なるが、とくに自死の問題は近年減少の傾向にあるとはいえ、毎年二万人を越えている。さらには「いじめ」、「虐待」など社会的問題は多岐に亘る。活動の幅を広げて、今後取り組むべき課題は多い。

さらには、これからの教会の働きは日本国内のみで終わらなくなっている。それに伴い、DPCもまたグローバルな視野からの活動を取り入れねばならない。幸いにしてルーテル教会は世界中に強力なネットワークを持つ。これを利用して新規のプログラムを開発しない手はない。

以上、挙げた課題は、DPCの将来性を握っている。感謝すべき課題ではないだろうか。

2014 年度ルーテル教職神学セミナーは、この年に新設されたデール・パストラル・センターと共同し「第 1 回臨床牧会セミナー」として開催しました。「それでも、主を見上げて～牧会の光と闇」との主題のもと、教職者が集いました。

現代の社会で、私たちは様々な痛みや悲しみに捉えられています。それは教会においても同様です。その困難や破れ、いわば牧会の闇の中にあっても、私たちが養われ生かされる信仰の歩み、そこに照らされる光を見出し、また慰めと励ましをいただき学びあうセミナーとなりました。

セミナーでは、基調講演「ルターと牧会」（鈴木浩先生）をはじめ、4つの分科会に分かれて、①「グリーンケア」（大柴譲治先生）、②「教会と人間関係」（堀肇先生）、③「牧師のメンタルヘルス」（石丸昌彦先生）、④「高齢者と教会」（賀来周一先生）の学びをしました。

以下はセミナーの最後の時間に、石居が全体のまとめとして話したものの内容を要約したものです。

今を生きる義認の信仰

石居 基夫

『福音と世界』（2015 年 1 月号）特集「教会とは何か」に、古谷正仁先生がお書きになった文中に Being church と Doing church という言葉がありました。

ありのままの存在を認め合っている教会と、活動によって成り立っている教会と。わたしたちはどうしても活動することで教会を作っていきます。しかし、わたしたちはいるだけでよい、そうやって招かれているのです。教会は何をするかではなく、どうあるのか、という本質をどんなふうに認め合えるか。

実は教会というものは、Doing がなければ Being Church も成り立たないのです。だから両方あるのです。ですが、わたしたちはどうしても何かして成果が上がるということがだいじだと思ってしまいます。右肩上がり、信徒が増える、大きく成長することだけが評価されるところがある。でもほんとうは、わたしたちが存在すること、神様に招かれていること、その教会の本質ということ、をわたしたちは忘れないでいたいということを、改めて考えさせられます。

一人ひとりの存在ということ、Being であるということ、神様に祝福されていること、許されていること、受け入れられていること、そのことを味わうものでなければならないだろうと思います。

教会自体は実際には活動もしていますし、その中では異なる意見もあり、ぶつかり合うこともあり、もしかしたら修羅場になることだってあるかもしれません。でも、そうしたことをみな分かち合える、許しあえる、そのことがまた教会の成熟を作っていくということだと思います。実際には教会が割れてしまうことだってあります。そうすると、回復することはなかなかむずかしいことです。痛みがある。そういう中でわたしたちは牧会者としての限界も感じるのです。けれど、そうであって究極的には神様に依り頼むことが許されているし、それしかないのだと思います。大きな視点が必要なのだと思います。

父が牧師として働いた教会で、難しい問題が起こった時、教会がなかなか成熟していないのだと言っておりました。そんな中で、「牧師としてあ

るということは大変じゃ」と言っていました、大変じゃと言いながら用いられた生涯だったのだと思います。牧師は、牧者として立てられている幸いを、辛い中であっても受け取っていくものかと思っています。

そういう中で、やはり、しかし、牧師だけが牧会者なのではなく全信徒祭司であるということが大切なのです。ルターの言う、聖と俗を分けない、教職者が特別なものではないということです。教職者もまたとりなされなければならないと。中世カトリック教会では一般信徒は、とりなされる存在、教職は神様との間でとりなす存在として聖別されていました。しかし、牧師も信徒も同じくとりなされる存在なのです。信徒中心でもなく教職中心でもなく、ともに神様によって牧されている存在であるということ。そこに、相互の牧会が起こります。信徒同士もそうだし、信徒と教職の間でも実は相互の牧会が起こるのです。

セミナーの最初に観た映画『ヤコブの手紙』では、手紙の形をとって、牧師ヤコブと信徒であるレイラの相互の牧会が始まります。それはヤコブにとって驚きでしたが、しかし喜びでもありました。神様がそこで働かれるその恵み、牧師が証しされている幸い、わたしたちはそうした具体的なやり取りの中でこそ自分が神様によって牧されていることを受け入れるのです。牧師も信徒も共に主を証しする。そうしたことを私たちが互いに、豊かに受けとっていくということです。

そうやって相互の牧会をする。その中で改めて、牧会者としての使命とはどういうものか、教会を牧会していく重たさが見えてくるものがあるのです。生まれたときから牧師という人はいませんから、わたしたちはあるときに牧師になる。それは按手を受けて遣わされたらすぐ牧師になるというものではないのです。少しずつ牧師になっていく。遣わされてあれやこれやとやりながら挫折もしながら、少しずつ牧師になっていくのです。

その中で教会とは何かを知り、牧者として責任を負うということも知る。これは重く受け止めなければいけないことです。

しかし、それは牧師がひとりで負わなければならないということではないと思います。役員を中心として教会全体が、この任を負う。説教と聖礼典という務めに対する責任は教会に与えられた務めなのです。その教会の務めに対して牧師が召されて大きな責任を負うことには間違いありませんが、牧師だけが負うのではなく教会もその責任を負っていかなければならないのです。教会の中で重荷をどのように分かち合っていくのか。また教会は世に立てられたものですから、教会全体がこの世に対する務めを負っていくこと、何をどんなふうに分かち合えるかを共に考えていく必要があります。

わたしたちはつい、自分の考えの中で牧師とは、教会とは、信仰とはこのようにあるべきだと考えてしまいがちですが、神様は大きな眼差しで新たな語り掛けをくださいます。その語り掛けを共に背負っていくことがだいじなのです。

この現実を生きるわたしたちを確かに抱きしめてくださる存在がある。それがわたしたちに聖書が示してくださる福音なのではないか。矛盾だらけのわたしを確かにそのままに抱きしめてくださるキリストがおられる。その恵みがわたしたちを生かすのです。生きる力になる。キリストの福音、主によって抱きしめられていく。だから、この現実をわたしたちも抱きかかえて生きることができるのです。そのことをほんとうにわたしたちは分かち合えるものでなければいけないと思いました。



デール・パストラル・センターの出版物のご案内

「スピリチュアルペインとそのケア」

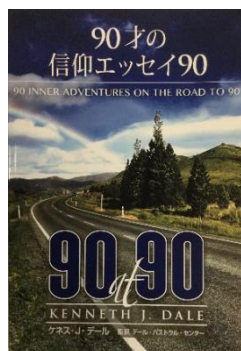
石居基夫編著、DPC 創立記念シンポジウム講演録 (2015 キリスト新聞社 1,600 円+税)



記念すべき第一回デール記念講演のシンポジウムの記録をまとめました。シンポジストは、スピリチュアルケアについての研究と実践的働きをしてくださっているウァルデマール・キッペス先生、窪寺俊之先生、そして賀来周一先生で、司会はグリーンフ・ケアをご専門とされている大柴譲治先生です。

牧会、医療そして福祉の現場では、生死の問題に直面する魂の苦しみや痛みに向かい合わなければなりません。また、信仰のあるなしに拘らず、誰もが人生の危機に、生きることの深い問いを抱きます。誰も避けて通ることの出来ない、いのちの問題へ取り組むための入門的一冊です。是非、お求めください。

「90才の信仰エッセイ90」 ケネス・J・デール著 (2016 DPC 発行 1,000 円)



ケネス・デール先生の90才を記念して、ご自身が書かれたエッセイ90編がまとめられました。これまでの長い信仰生活と、現在も続けられている神学の学びの中で心に抱き、また伝えたいと願ってお書きになられた珠玉のエッセイ（日本語翻訳：DPC）です。一つのエッセイが一頁におさまる短い文章ですが、神との関係に心を置き、この世界の様々な問題について祈りをもって書かれたことが伝わってきます。懐かしい、優しい先生のお声やまなざしが思い浮かぶようなエッセイ集です。お求めは、センターにお問合せください。

第3回臨床牧会セミナー 主題：「危機のただ中に立つ牧会 ～あなたを支えたい～」

私たちは、それぞれの時期に人生の危機を迎えます。その危機に立つ一人ひとりを神のこば、キリストの恵みにおいて支えること。これが牧会の務めです。しかし、同時に牧会そのものが危機に立っているのかもしれません。牧師も信徒も牧会の現場の中で、傷ついたり、悩んだりするものです。この牧会の働きのために、具体的な課題を学びながら、働く牧師や教会にどのようなサポートが可能なのか、必要なかを考えてまいります。

日程：2019年2月12日（火）～14日（木） **会場：**ルーテル学院大学

基調講演：関野和寛牧師（日本福音ルーテル東京教会牧師、DPC 所員）

対象：各教派教職者 お申し込みが必要です。DPC 事務局までお問合せください。

- **DPC 事務局について** DPC 事務局には常勤の職員がおりません。そのためお問合せへのお返事に多少お時間をいただきますことをご了解ください。お急ぎの場合は、ルーテル学院大学代表電話 0422-31-4611 へご連絡をお願いします。



- **編集後記** 講演会で、研究会で、セミナーで。たくさんの出会いをいただきます。その向こうの、まだお会いできていない、もっとたくさんの方々へ。「紙」以上のものをお伝えできたら、と願いをこめてお届けいたします。

写真提供「すずらん」：eriko ogura 様（本学卒業生）